

麗らかな春の日が差す昼下がりに、昼食をとる客も捌け店内の椅子も大分空いた閑静な喫茶店に四人の男がいた。

一山いくらの大量生産品の背広を着た草臥れた男に、仕立ての良い背広を着た苦労性の雰囲気を漂わせた垂れ目の男、どこことなく軽薄そうな雰囲気を漂わせる長身瘦躯の男のおそらくは同世代であろう三人と、三人よりは年嵩であるが未だ若手と呼んで差支えがないであろう男が各々の飲み物を前に卓を囲んでいる。

「いやいや、どうもお忙しい中、態々ご足労いただきましたありがとうございます、皆さん。改めまして自己紹介を、あたしはこういう者です」

そう言つて年嵩の男の差し出した名刺には、『週刊ニュースセブン編集部政治局関口辰巳』と記されている。

「これはどうもご丁寧に。私は中寺秋彦と言います」

「……どうも。榎木礼二です」

「どうもどうも、木場修二郎です」

男の挨拶に合わせ、垂れ目の男、草臥れた男、長身の男が口々に名乗りを返す。その後一拍の間をおいて垂れ目の男が口を開く。

「それで記者さん、お聞きした用件ではあいつの話を書いたことでしたが……」

「ええ、そうですそうです。与党所属の若手代議士赤野聖先

生。彼にはうちも注目してましてね。方々駆けずり回つてようやく話を聞かせてもらえそうな人を見つけたつてえわけでございます」

「話と言つても何を話せばよいのですか？ 確かに聖とはそこそこの長い付き合いですが、あいつも私も就職してからはとんと関わりがなかったので最近のことは話そうと思つても無理ですよ？」

「そうですね、僕も先輩が大学を卒業して以来あつていないですから」

そう口にする男たちの様子を目にした記者の男は、ふと当惑した表情を浮かべたが、やがて得心が行つたかのように手を打った。

「おや、どうやら何か行き違いがあつたようでございますね。

いえね、何も赤野先生の最近のご動向だとかそんな真面目なことを聞こうつてわけじゃないんですよ。大体中寺さん、うちみたいなカストリ雑誌がいまさらそんな高尚な記事を書いても売れると思いませんか？」

男の名刺に記された雑誌名が、大衆向けに口さがないうわさ話の種を提供するタブロイドの類であることは知つていたのか、垂れ目の男は遠慮がちに肯定のしぐさを取る。

「そうですね。そういうわけのうちが書きたいのは『最近話題の政治家赤野聖の友人が語る知られざる姿』みたいな記

事です。つまりあたしがお聞きしたいのは皆さんの知る赤野聖さんについてです」

まあ要は思いついた話みたいなものだと思うだけ、と言いつつ記者の男は自分のグラスを手を取る。

「ああ、失礼しました。こども話し通しだとも。それで、ご協力いただけますか。もちろん情報提供者が分からないようにはいたしませんので」

男たちがそれぞれに協力の意を示すのを見て記者の男は続ける。

「ありがとうございます。確認ですが榎木さんが赤野さんの大学の後輩、中寺さんが高校の、木場さんが中学の同級生ということでしたね。……よし、それじゃ榎木さん、中寺さん木場さんの順でお願いします」

「……先輩の思い出、ですか」

そう口にした男は何かを探るように虚空を眺め、暫く押し黙った後に口を開く。

「あの人と初めて会ったのは私が大学の二年生の時だったと思います。確かゼミの配属前の研修で案内役のようなことをしていた時に顔を合わせたのが最初だったはずですよ」

「ほうほう、ではあなたから見た赤野さんの印象や人となりについてはどうですか？」

「印象ですか……。普通に良い人でしたし好い先輩だったと思いますよ。私もご飯を奢おごってもらったり、相談に乗ってもらったり、過去問流してもらったりと何かにつけてあの人には世話になりましたからね」

記者の男がメモを取る動きが落ち着くのを待ってから、男は再び口を開く。

「まあ、そんな感じでなんだかんだと面倒見のいいひとでしたし、仕事も出来ましたから人望はあったほうだと思います。同じゼミに入ってから、見かけるたびに仕事を頼まれていたり、誰かの相談に乗っていたりしたので、この先輩はいつか倒れるんじゃないかと仲間内でひそかに心配していたりもしましたね」

「なるほど、ありがとうございます。ところで少しお聞きしたいんですがね、赤野さんは在学中は何かこう政治的なのに関係することはやってらっしゃらなかったんですか？」

「政治的なことですか……」

男はそうこぼした後に再び何かを探るように長考を始めた。暫くの間うなり声を上げながら、話題を探しているようであった男が唐突に顔を上げ、口を開いた。

「……あまりご期待に沿えるようなものではないかもしれませんが一つそれっぽいものがあつたかなと思います。それでもいいですか？」

「ええ、もちろん大丈夫です」

「それでは、あの人はまあ常日頃から自分たちのいる場所には自分たちの力でよくしていけないといけない、風通しのいい場所にしていかないといけないみたいなことを言っていましたね。それでなのか単に相談事を受ける延長線だったのかは知りませんが、同じゼミの有志の学生を集めて互助会みたいなものを作っていました。いろいろと手広くやっていたみたいですよ」

「ほう、具体的にはいったいどんなことをやってらっしゃったんですか？」

「私はその互助会とやらには深く関わっていませんでしたので詳しくは知らないんですけどもね、小さなことではそれこそ研究室周辺の清掃やら、新しく入ってきた後輩に対するインストラクター的な諸々もろもろやらですかね。大きな案件だと参加者の

一人が助教にバワハラか何かを受けた時に、証拠やらなにやらそろえて大学の外に持って行って助教の首飛ばしたかどうか聞きましたね」

「そりやあまた随分と派手に動きましたねえ」

「まあ大学のハラスメント相談センターなんぞろくなことしませんがからねえ……相談内容を当のハラスメントしたって言われてる側に流したなんて話最近も結構な頻度で耳にしますから」

「それはそうとさっきのお話では榎木さんご自身はその団体には関りを持たれてなかったようですが、そりやあまたどうしてですか？」

「いえ、全く関わらなかつたわけではないですよ、清掃活動なんかは一緒になってやりましたからね。私があこの団体に深入りしなかつたのは、単に僕があの手のお題目を掲げたような団体のことが苦手だったからですね。……あの頃に比べればだいぶ落ち着いたと思いますですが右であるかと左であるかとああいふ綺麗ごとを目標にする団体にそもそも関わりたくないのですよ」

「なるほど、あなたノンポリですか。其れも意識的にそうであるうとしてゐるタイプと見ました。どうですか？」

「……その通りです。流石記者さんですね」

「こんなカストリ雑誌のブンヤを持ち上げたって何にも出ま

せんよ。ちなみにこれは取材とは何も関係ないんですが、何故そんな主義に？ いえ、言いたくなければもちろんけつこうですが」

「……うちの朝刊はしんぶん赤旗でしてね……後は察してください」

「なるほど。それで話を戻しますけれども、赤野さんはその団体のトップでいらつしやつたと」

「ああ、言い忘れてました、その団体のトップは先輩ではないです」

「……はい？」

「ですからその団体のトップを務めていたのは赤野先輩じゃないです」

「しかし、赤野さんがその団体を最初に作つたんじゃないんですか？」

「そうです。確かに赤野先輩が発起人となって立ち上げた団体だったんですが、トップはあの人じゃあなくてあの人と同じ位には人望があつた別の先輩がやつてましてね。ナンバーツ一はトップの指名でまた別の先輩がやつていたのであの方は確かナンバースリーくらいの立ち位置だったと聞いています」

「そうなんですか、また何とも言えない立ち位置ですか、それは」

「この人選に関してはゼミの中でもいろいろ言われてましてね。トップの人は人望はあるんですが少々猪武者みたいな人でして、赤野先輩によく知恵を借りてたんですよ。その上、ナンバーツーの人選も先輩に相談して決めたとか言う話をしていたので周りからはあれは傀儡^{かぐわい}政権だなんて噂されてましたね。……赤野先輩についてぱっと話せそうなのはこれぐらいですね、大丈夫でした？」

「いえいえ、ありがとうございました」

「あいつとの思い出ですか。まあ先ほどの榎木さんのお話を聞いてなんとなく勝手はつかめたので、何とか出来る限りはやってみましょう」

そう言った男は目にどこか懐かし気な色を浮かべたまま話を続ける。

「あいつと初めて会ったのは高校に入学して少し経った頃でした。同じ部活だったのですよ、私とあいつは。高校時代はクイズ研究部に所属していましたね、あいつとは同期のよしみもあってよくやりあっていました。自分で言うのもなんですけど、部活の同期の中でもあいつとは仲がいいほうだったと思いますよ。二人一組で団体戦に出たこともありましたが、あの頃は私もあいつも女っ気がなかったもので十二月に部室で悲しい独り身で集まったりもしましたしね。いやあ懐かしいなあ」

放っておくといつまでも昔の話をしそうな勢いの男に対し、記者の男が口を挟む。

「なるほど、随分仲がよろしかったんですね。それでは先ほど榎木さんにもお聞きしましたけども、赤野さんは在学中に現在に通じるような活動とかなさってたんですかね？」

「いやあ、流石さすがにあの頃はあいつもまだ高校生ですからねえ。特に表立ったことはしてなかったと思いますよ」

「あら、そうなんですな」

「ああ、しかし先ほどの榎木さんの話を聞いていて思ったんですがあいつも丸くなりましたねえ」

「丸くなったとは？」

「いえ、私の知っているあいつは若かったというのもあるんじゃないですが、もう少し過激というか剣呑な感じでしたね。クイズ研究部に所属している人間なんか、多かれ少なかれ変わり者が多いんですがあいつはその中でも変わってましたね」

「うーむ、何かこう榎木さんのお話と比較できるような具体的なエピソードはありますか？ 今のお話だけじゃあ何も言えませんが」

「具体的なエピソードですか……ああ、そうであればあったな。うちの部活ではクイズする合間合間とかに雑学の収集がてらよく他愛もない雑談をしてましてね、私らが一年生の時に何かの拍子で最近の政治か何かの話題になったんですよ。そしたらあいつが若い世代がより活躍できるように、世の中の全体の世代交代が必要だとか、その為には草の根運動などの継続的な活動が必要だとか急に言い出しましてね。いやーあれは驚きましたね、それまでただの理屈っぽいびょうたんなり瓢箪ひょうたんみたいな野郎だと思ってたやつが、急に立て板に水を流したように話し出すんですから。こいつも僕らと同じ変なやつなんだなあと思って話し出したのがあいつと仲良くなるきっかけでしたねえ」

「十年近く前の話でしように、よく話していた内容まで覚えてらっしゃいますねえ」

「いえ、似たような話をその時だけじゃなく三年間事あるごとに聞かされていたので、なんとなく覚えてしまっただけです」

「なるほど、しかし言っている内容は先ほどの榎木さんのお話とそんなには変わらないようですね」

「そりゃあまあ言ってるのが同一人物ですからねえ、せいぜい五、六年の間にそんなにガラッと変わってちゃあ逆に心配ですよ」

「まあそれもそうですねえ。その他には何か高校生時代の赤野さんの面白かったり記事にできそうだったりするようなエピソードなんかございますか？」

「そうですねえ……あいつと仲があんまりよろしくなかった先輩の話とかはどうです？」

「ほうほう、面白そうな話ですねえ、ぜひよろしくお願ひします」

「うちの部の先輩で私も含めて結構な人数がお世話になった人がいますからねえ、あいつも普段はまあそれなりに懐いてたんですけれどもね。その先輩がうちの部に数多いた社会不適合気味の連中の中でも輪をかけて社会不適合な人だったんですよ」

「ほうほう、どんな感じの方だったんです？」

「普段は別段変わったところのない人でしたよ。始めたばかりで右も左も分からなかった私らにクイズのいろはを教えてくださいました人でもありましたね。ただこの人がまたある種の政治的な思想に傾倒してる人でしてね。共産主義者というかアナーキストというか、今時あまり見ないそんな感じの人だったんですよ」

「その方もその方で随分とぶっ飛んでらっしゃいますね……」
「そんなもんだからクイズの合間に床屋政談となると、当然その先輩は社会に変革を起こすべきだとかその為には多少の流血はやむなしだとか自分の意見を言うでしょう、それに赤野が噛みつきましてね。その手の話題が出た時にその二人がいると十中八九話が長引くので、二人がいる時はそういう方向の話題が出ないよう気を付けてましたね。あの時ほど親が言っていた人前で野球と政治の話をしてはいけないってやつ的重要性が身に染みたことはなかったですね」

「いやあ、下手なところでその手の話題を出すと一瞬で火だるまにされますからねえ……」

「まあでも今になって考えればあいつがあの人にああも噛みついた理由も分からなくはないですがね」

「ほう、と言うと？」
「ほら、よく宗教関係で異教徒よりも異端者のほうが扱いが

厳しいって言うじゃないですか、赤野にとって私らは異教徒で先輩は異端者だったんだと思います。なまじ世界を改革するっていう大枠が一致している分、気に食わなかったんですよ」

「なるほど、興味深い考え方ですね」

「それじゃあ大分長く話してしまいましたし、私はこれくらいでいいですか？」

「ええ、ご協力ありがとうございました」

「あの野郎との思い出話ねえ……確かに俺はあいつとはそれなりに古い付き合いですがあいつが絡んだ話にろくなものありませんよ？」

「いえいえ、むしろそういう話を聞かせていただきたいんですよ」

「そんなじゃまあ、頑張って話しますけどもね。あいつと初めて会った時の状況は中寺さんとほとんど同じです。たまたま同じ部活に入った同期でした。まあでも同じクラスでもない中高生のガキがつるむようになるきっかけなんざそれくらいしかないでしょうから、代わり映えがないのはご容赦をと言うことで。初めはただの同期位の仲でしたが、これが意外と気が合いました、あいつのほかにもう一人加えた三人でよく駄弁だべってました。ただお互いにたまに使ってたあだ名のせいで、よく周りからは仲がいいのか悪いのか分からんと言われましたよ」

「へえ、どんなあだ名だったんです？」

「俺はクズ、赤野の野郎はサル、もう一人はグスって呼ばれてましたな」

「また随分なあだ名ですねえ。そりゃあそう言われるでしょうよ」

「今にして思えばひどいものですが、当時はいろいろあったとはいえ普通に使ってたんで、いやあ若さってのはこわいで

すね本当に」

「まあそういう物ですからねえ……ちなみに木場さんは今赤野さんとご親交持たれてるんですか？」

「ええ、細々とですがね」

「なるほど、ところで少しお聞きしたいんですけどもね、木場さんはここにいるお三方の中では赤野さんと最も古い付き合いなわけじゃありませんか。そこですね、これまでのほかのお二方のお話を聞いて思ったことなんかを聞かせていただいてもかまいませんか？」

「そりゃまあいいですよ。お二人の話を聞いた感想ですか……あの野郎も随分猫を被るのが上手くなつたもんだと思えますよ」

「猫、とは？」

「とは何もそのまんまですよ、記者さん。お二人の話に出てきた赤野聖はこつちからすりゃあ大人しいもんだってことです。俺の知るあいつはもつとやばいやつですから」

「……その件、ちょっともう少し詳しくお話しいただけますかね？」

「ええ、いいですよ。さつき中寺さんがあいつと床屋政談的なことをしていたと言っていました、俺ら三人も昔からよくそういう話をしてたんですよ。そういう時にあいつがよく言ったのが既得権益を持つ人物、特に老年層の一掃と平等な社

会の実現についてだったんですよ。しかもその中身がまあ過激で、ざっくり言えば既得権益層をつるし上げろってなことを言っていたんですよ。だからさっきのたとえば組織の風通しをよくしようとか、世の中全体の世代交代とかを聞いた時はあいつも思ってもいないようなお題目で言葉の外面を整えられるようになったんだなあ、と少し驚きましたよ。俺らと呑んだりしている時は中身がばれてるからかなんの取り繕いもしませんからね、あの野郎」

「するってえと、何ですか木場さん、赤野さんは本来どちらかという中寺さんのお話に出てきた先輩のような感じだったと？」

「ああ、そうですね。まさにそんな感じですよ。むしろそうだったからこそ俺らはいいつをサルと呼んだんですから。だから、その件の先輩とやらにやたら突っかかっていったのも、単に昔の自分を見ているようで気に食わなかったとかそういう同族嫌悪たぐの類たぐでしょうどうせ」

「なるほどなるほど、ありがとうございます。これは面白い記事が書けそうですね、ご協力ありがとうございます」

「いえ、それほどでも」

「では、時間も時間もすしあと一っだけ木場さんにお聞きして今回はお開きということでしょうか？」

木場を含む全員が肯定の意を示したことを確認し、記者の

男は続ける。

「最後に赤野さんに対して何か一言ございますか？」

日も沈み、そろそろ人々が家路につき始める時間帯に喫茶店のテーブルには相変わらず四人の男がいた。

「いやあ、しかし驚きましたねえ。話の中であれだけあけすけに言っていたのであそこでそういう方向の言葉は来ないと思っただけですが」

「そりやあまあ、ぼろくそに言ったとはいえ古なじみの友人です。素直に幸運を祈るぐらいはしますさ」